

歴史

ホンジョンウク

洪宗郁 (同志社大学言語文化教育研究センター准教授)



奎章閣韓国学研究院編、^{チョンヨンフン}全勇勲責任企画
『朝鮮人の朝鮮旅行』(クルハンアリ、2012年)

규장각한국학연구원 엮음, 전용훈 책임기획 『조선 사람의 조선 여행』
(글항아리, 2012년)

まず洗練されたデザインの表紙とともに「奎章閣教養叢書7」というシリーズ名が目に入る。最初にこの本を編集した「奎章閣」について少し説明しておいた方がいいだろう。奎章閣は、朝鮮王朝時代の1776年に正祖の命により王立学術機関として設置され、学問と政治の中心として機能した。その後浮沈を重ねることになるが、植民地期に京城帝国大学に移管された後、解放後もソウル大学の一機関として残り、現在に至っている。近代以降は、古文献所蔵施設としての性格が強かったが、1990年代から資料整理と研究事業が本格化され、2006年にはソウル大学の韓国文化研究所と統合して名前を「奎章閣韓国学研究院」に改め、名実共に学術研究機関として生まれ変わった。韓国文化研究所は、後に紹介する金容燮回顧録によると、日韓条約をきっかけに盛んになった1960年代の文化学術運動の気運を受け継いで1969年に創設された組織である。奎章閣と韓国文化研究所の統合は、形式的には一大学内の組織改編に過ぎないが、その歴史的・社会的意味を吟味するなら、それ自体が韓国学の伝統と革新の合流を象徴する出来事といえるかもしれない。

現在奎章閣韓国学研究院(院長・金仁杰)は、「朝鮮の記録文化と法古創新の韓国学」をテーマにした「人文韓国事業」(HK事業、日本のCOEのような大型研究プロジェクト)の一環として、「奎章閣教養叢書」を第7巻まで発刊した。本書は、その中でも『朝鮮人の世界旅行』『世界人の朝鮮旅行』に続く3部作の1つであり、旅行を「窓」にして、朝鮮半島に生きていた様々な人々の素顔を描いている。部屋に横になって楽しむという臥遊、思悼世子の温泉旅行、古人の星座旅行、女性の山水遊覧、パンソリ名唱の巡行、画家たちの金剛山行、科擧の道に出た士、暗行御史、島流しに遭った人、行商人の旅などを経て、近代に入ってから、崔南善の白頭山登り、学生の修学旅行、朴泰遠の小説に描かれた仇甫氏の日まで。古典的な書画の図版をふんだんに配置し、また新たに発掘された貴重な写真を加えることで、何よりも目で楽しめる本である。本書を含む奎章閣教養叢書の発刊は、200余年の奎章閣の歴史の中で、王の記録が研究者の記録を経て市民の記録として再誕生するという、いわゆる記録の民主化の一局面を表現しているといえよう。

以下では、本を読み終わって記憶に残る内容からいくつかを紹介したい。「政治的試験の場となった王世子の温泉旅行」では、旅に出た思悼世子が、常に父の英祖を意識しながらも、民たちを温かく見守っている姿を描いている。思悼世子の悲劇的な最後を思い出すと胸が苦しくなってくる。政治的な問題を抜きにしても、当時の温泉浴の風習に関する詳細な記述だけで読むに値する。

「奥の閨房から出て、新天地と向き合う」は外出が不自由だった伝統時代の女性たちの話である。夫と

一緒に旅に出た延安李氏が残した「40年詰まっていた胸襟」が一気に解けるようだという表現は、旅行が朝鮮女性の日常にとってどれだけ大きな逸脱だったのかを推察させてくれる。咸興判官の妻の意幽堂南氏が、東海の日の出を見たくて夫に何度もねだった結果、明け方に浜に出て寒さに震えながら日の出を待っている場面の描写は、ウィットに富んでおりとても面白かった。

「三十四歳、12年の苦行の末に手に入れた家門の栄光」は、ある田舎の両班が残した日記をもとに再構成した科学の受験にまつわる話である。試験科目の詳細な紹介とともに、ソウルに上がったり下がったりする過程で泊まったところ、食べたもの、出会った人々などが詳しく描かれている。例えば、ソウルに着いてから試験の内容が変わったことをはじめ知って右往左往する田舎の両班の姿には、読者も同情せざるをえなくなる。

「錯綜する苦痛とぴりとした快楽が交錯する道」は、水戸黄門の韓国版ともいえる暗行御使の話である。韓国でも時代劇の素材としてよく取り上げられ一定の固定したイメージがあるが、この文章を通してはじめてその真の姿を垣間見ることができた。特に、暗行御使の派遣の情報を察知して事前に御使を探り出そうとする地方権力の試みと、身分を隠しながら監察を続けようとする暗行御使との対決はとても面白い。邑城の櫓を飛び越えて豪快に「出道」を叫ぶ場面から地域の妓生との愛の物語まで、何一つ捨てるものはない。

「小説家仇甫氏の幸せ探し」は、植民地期にモダニズムを提唱した朴泰遠の小説の話である。最近、韓国では小説や映画を中心に「京城物」というジャンルが登場するほど、植民地期における近代性の描写がブームになっているが、植民地期の小説である「小説家仇甫氏一日」はその元祖ともいえる。仇甫氏の後ろを追って京城を一周していると、伝統文化と新文化が混ざり合って演出される植民地近代の日常を満喫することができる。

本書では、旅を切り口にして伝統時代から近代に至るまで、朝鮮半島の人々の日常とそこからの逸脱を淡々と描いている。歴史は、ややもすれば政治・経済のような硬い話になりがちである。それで朝鮮社会にも発展の力があつたという内在的發展論が唱えられ、またそれは西欧を基準とした歴史観をまねたことにすぎないという批判もなされた。ただこの本では少し異なる方向から朝鮮の歴史に光を当てている。朝鮮半島に生きていた人々のユーモアと余裕は、いかなる政治的・経済的闘争よりも力があり、西欧中心主義云々を超えてもはや人間普遍的尊厳に触れていたことを、私たちはこの本を通して気づくようになるのである。

最後にこの本の「責任企画」者である全勇勲・奎章閣韓国学研究院 HK 教授に良い本を世に出してくれたことに感謝の意を送りたい。全勇勲氏は4～5年前に京都で1年間滞在されるなど、日本とも縁が深い方である。



カンマンギル
姜萬吉 著

『姜萬吉自叙伝：歴史家の時間』（創批、2010年）

강만길 『강만길 자서전: 역사가의 시간』 (창비, 2010년)



キムヨンソプ
金容燮 著

『金容燮回顧録 歴史の小径を歩みつつ：一解放世代学者の歴史研究・歴史講義一』

(知識産業社、2011年)

김용섭 『김용섭 회고록: 역사의 오솔길을 가면서 - 해방세대 학자의 역사연구 역사강의 -』

(지식산업사, 2011년)

韓国の歴史学界の二人の巨匠の足跡をまとめた作品二つが、ほぼ同時期に刊行されたことは喜ばしい出来事である。数十年間にわたって朝鮮史研究を最前線で引っ張ってきた歴史学者の文章らしく、二冊ともに単純な自叙伝や回顧録を越えて、鋭い同時代史であると同時に素晴らしい史学史となっている。

まず金容燮回顧録は、解放後の韓国における歴史学界の流れをその真ん中に立っていた当事者の視点から叙述している。その中でも特に1960年代の文化學術運動が朝鮮史研究者にどのような影響を与えたかがよく表れているが、いわゆる植民地主義史学との対決が先輩研究者との人間的な葛藤として現れたもどかしい場面も登場する。金容燮回顧録は、2009年に仕上げられた全8巻の著作集について、研究の経緯や問題意識の展開過程を詳細に明らかにすることで、その充実した解題としての役割も果たしている。特に「農業史に関する資料を求めて」で描かれた研究者と史料とのかくれんぼからは緊張感さえ感じられる。さらに、地主佃戸制か自耕小農制か、地主か農民か、朱子か孟子かといった、著者がこだわってきた朝鮮の農業および農業研究をめぐる対立構図も臨場感をもって伝わってくる。

本の第2部は史学史と関連した内容である。まず、1960年代に著者の言う文化學術運動の真ん中で植民地主義史学と対決する過程で生産された記念碑的な論文たちが収録されている。特に「日帝官学者たちの韓国史観—日本人は韓国史をどうみてきたか—」（『思想界』1963年2月号）は、梶村秀樹によって日本語に翻訳され、日本の朝鮮研究にも大きな影響を及ぼした論考である。また、大学での「韓国史学史2—近代史学史—」の講義録をもとにした史学史の整理も収録されている。その講義が設置された経緯とそれをめぐる葛藤の紹介までを含めており、それ自体が今後史学史の1ページを飾ることになるだろう。

一方、著者が自説を積極的に展開しているという点で、この本は回顧録でありながら依然として論争的である。それを考えると、ここ20年くらい著者の「経営型富農」という概念が複数の研究者によって批判されている点について、少し言及があっても良かったのではないかという気がする。また漢四郡の位置をめぐる鴨緑以北説と鴨緑以南説をもって植民地主義史学と民族主義史学を分ける基準として

いることには少し疑問がある。漢四郡の問題は、著者が提示した「衝撃、対応、統合の文明」としての朝鮮文明という枠組みから見ても（『동아시아 역사 속의 한국문명의 전환: 충격, 대응, 통합의 문명으로』知識産業社、2008年、参照）、もっと積極的に朝鮮史の一部として検討されるべきであろう。

著者には普遍的発展法則を朝鮮史に機械的に適用したというイメージがあるが、それは必ずしも正当な評価ではない。著者は、上記の「日帝官学者たちの韓国史観」ですでに“世界史の発展という一般性の配慮下に朝鮮史の特殊性をいかしたそういう朝鮮史観、そして朝鮮民族の風土色がやわらかく流れ出してくるそのような朝鮮史観”（金容燮（梶村秀樹）「日帝官学者たちの朝鮮史観—日本人は朝鮮史をどうみてきたか—」『朝鮮研究月報』15、1963年3月）を立てる必要性を力説していた。著者は自分の農業研究を総括しながら、「結負制」を朝鮮固有の古朝鮮文明に由来するものと見なし、その古朝鮮文明の伝統が綿々と続いていたことを強調した（詳細は前掲『동아시아 역사 속의 한국문명의 전환』参照）。

姜萬吉自叙伝は、時代順に記述されており、著者の人生の軌跡を追う歴史の旅へ読者たちを案内している。著者の物語は「国民学生」として経験した植民地末期の話から始まっている。それに続く解放空間における中学生同士の左右対立や朝鮮戦争の話は、歴史家の目を通して見た鮮やかな現代史のレポートとなっている。もはや有名な話になっているが、独裁政権のもとの「解職教授」としての経験談は、もう一度民主主義の大事さを感じさせてくれる。著者の研究と学問は、日本とも深い関係を持っていた。1970～80年代における日本人および在日朝鮮人の学者との交流の話からは、冷戦と独裁をくぐって慎重に続けられた学術交流の現場を垣間見ることができた。

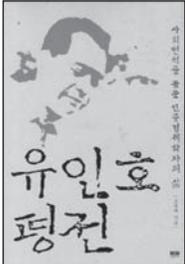
民主化以降、南北朝鮮の歴史学者交流の第一線での活躍は、著者が一生をかけて追求してきた「分断克服史学」を文字通り体現したものと評価できよう。付録の「親日反民族行為真相究明日誌」は、著者が委員長を務めた「親日反民族行為真相究明委員会」の活動に対する誠実な記録である。特に「過去清算」に対する否定的な見方が依然として韓国社会の一隅に残っていることを考えると、一連の活動に対する後代の評価のためにも、とても貴重な史料になると信じて疑わない。

金容燮回顧録が著者の学問的遍歴や韓国の歴史学界の事情に傍点が置かれているなら、姜萬吉自叙伝は学問と社会、学問と大衆との関係に主眼が置かれている。もし金容燮回顧録を一言で「史学史」と呼ぶことができるなら、姜萬吉自叙伝は「民主化運動史」としての役割を果たしている。何よりも金容燮氏の文章が研究者向けであるのに対して、姜萬吉氏の文章は一般市民を読者として想定している。いろいろな面で金容燮回顧録と姜萬吉自叙伝には、それぞれ二人の巨匠の個性がよく表れている。

所々で二人の歴史学者の人生が交差する場面が確認できることも興味深かった。国史編纂委員会で一緒に勤務した経験、そしてともに韓国史研究会を立ち上げる過程などである。姜萬吉氏の協力を得て高麗大学図書館所蔵の未登録資料を使って、金容燮氏が高阜金氏一家の地主経営に関する論文を書いたことも、両氏の本でともに取り上げられている。何よりも金容燮氏が回顧録の執筆を躊躇していたところ、姜萬吉氏から“その史学史関係の文章あるんじゃない、それを使えばよいのに、なにを言っているかい”と「特有の慶尚道なまり」で執筆を勧められたというエピソードは、数十年にわたったお二人の同志的關係を示すようで心が温まってくる。

2012年12月、立命館大学と同志社大学が主催し、京都コリア学コンソーシアムが協力する形で、姜萬吉氏を京都に招いて講演をしていただいた。長い間奉職された高麗大学で直接薫陶をうけた弟子たち

をはじめ多数の若い研究者たちに囲まれて、韓国の民主主義と南北朝鮮の統一について熱く語っていた姜萬吉氏の姿は、ながらく記憶に残るだろう。



チヨヨンレ
趙容来 著

『ユインホ 評伝—社会変革を夢みた民衆経済学者の生—』（人物と思想社、2012年）

조용래 『유인호 평전 - 사회변혁을 꿈꾼 민중경제학자의 삶 -』

（인물과 사상사, 2012년）



キムサムウン
金三雄 著

『パクヒョンジェ 評伝—時代の矛盾と対決した不穏な経済学者の肖像—』

（ハンギョレ出版、2012年）

김삼웅 『박현재 평전 - 시대의 모순과 대결한 불온한 경제학자의 초상 -』

（한겨레출판, 2012년）

1980年5月15日、「ソウルの春」が終わろうとしていた頃、「最初の汎知識人時局宣言」と評価される「134人宣言」が発表された。維新体制の末期から芽生えた抵抗の動きが、朴正熙死後の急変する政局の中で具体化されたものであった。その日現場で宣言文を朗読した人物は、他にもない『韓国経済の実像と虚像』（1978）、『民衆経済論』（1982）で有名な経済学者の兪仁浩であった。そして「ソウルの春」が光州の悲劇とともに幕が降りると、兪仁浩は、いわゆる「金大中内乱陰謀事件」にかかわったという疑いで、西大門拘置所と南漢山の陸軍刑務所を転々としながら数か月間収監されることになる。また、職場の中央大学からも追い出され「解職教授」としての生活を余儀なくされた。

そうしていたところ、1983年6月、兪仁浩は、同志社大学で「韓国の経済と民衆」と題した講演をするために、28年ぶりに日本を訪問することになる。実は日本の京都は、1949年5月の密航から勉強を終えて1955年に帰国するまで若い時を過ごした、兪仁浩にとっては第2の故郷のような所であった。今回の『兪仁浩評伝』の発刊は、民主化の空気を満喫することもなく早くも1992年にこの世を去ったことで、人々の記憶から忘れられかけている兪仁浩の人生を復元したことにその意義があるだろうが、それに劣らず、兪仁浩自分が残した日記をもとに、1950年代の京都を中心とした在日朝鮮人の生活と闘争を事実的に描き出していることにも重要な意義を認めることができる。

兪仁浩は1949年6月に建国小学校に就職するが、すぐに左翼と見なされ追い出された。10月には朝連傘下の京都の梅津小学校に就職するが、すぐに学校が閉鎖されると、今度は夜学に参加することになる。1950年には在日本朝鮮留学生同盟の推薦を受けて立命館大学に入学することができた。在日朝鮮人学生と末川博総長や経済学部の武藤守一教授との交流の話からは、民主主義の機運があふれていた立命館の雰囲気垣間見ることができる。その他に銀閣寺近くにあった在日朝鮮人学生の青丘寮、そして西院・

梅津・壬生などでの在日朝鮮人の生活ぶりが事実に描かれている。

兪仁浩は民戦と日本共産党に所属し、京都の学生デモを主導する位置にあった。1952年2月には右京税務署への投石事件で逮捕されたこともある。その後ソ連への密入国を図って北海道まで行くが、再逮捕され京都に移送されてしまった。当時の時代像を物語るエピソードといえよう。このような詳細な内容が含まれている1949年から1955年までの日本留学中の日記は、日本人の知人によって保管されていたものを、2011年に兪仁浩の弟子でジャーナリストである著者が遺族を通して入手し、今回評伝を書き上げるようになったということである。

帰国後1958年に東国大学経済学科の専任教員となった兪仁浩は、4・19と5・16を相次いで経験することになる。4・19当時に学生デモに友好的な立場をとった兪仁浩は、その後民主党政府が反動化していく渦中で大学から追い出されることになる。逆に1961年5月のクーデター以降は、国家再建最高会議企画委員会の専門委員として委嘱されるとともに大学にも復職し、経済開発計画の立案などに参加することになる。〈4・19＝善〉〈5・16＝悪〉という固定観念では把握しきれない兪仁浩の屈折した歩みは、多くのことを考えさせる。1963年に中央大学に移籍した兪仁浩は、冒頭で述べたように経済学者・民主化運動家としての活躍を続けていく。

2012年には民族経済論で有名な朴玄塚の評伝も、独立運動史の研究者であり『張俊河評伝』『李泳禧評伝』などを著述している金三雄氏によって発表された。今になってはあまりにも有名な話である「少年パルチザン」としての経験から始まり、「人革党」事件、金大中の「大衆経済論」との縁、『民族経済論』（1978）の出版へとつながる波乱万丈の一生が、生き生きと描かれている。維新体制の末期の1979年3月に「統革党」再建陰謀の疑いで再逮捕された朴玄塚は、朴正熙の死を西大門拘置所で聞くことになる。もし維新体制が続いたなら、1980年代に韓国資本主義論争を主導した朴玄塚の目覚ましい活躍はおそらく見るができなかつただろう。1993年、朴玄塚もまた病気でこの世を去り、2006年には全7巻の『朴玄塚全集』（해밀）が出版された。その第1巻には朴玄塚の「肉筆回顧録」が収録されているが、その回顧録は今回の評伝の執筆にも大いに参考にされたとみられる。

先に紹介した歴史学者の金容燮と姜萬吉の人生が互いに交差していたように、韓国の民衆的・民族的経済学を導いた兪仁浩と朴玄塚の人生の軌跡も、1950年代末に「韓国農業問題研究会」で初めて遭遇して以来、多くの部分で重なっていった。兪仁浩が主唱した「国内資源活用主導型」経済発展路線と朴玄塚が夢見た「民族経済」すなわち「相対的自給自足体系」は、決して異なるものではなかった。また、晩年に病魔と闘いながら、兪仁浩が韓国社会では先駆的に提起した「公害」と「環境」の問題、そして朴玄塚が発した自由貿易協定（FTA）は経済従属の完成に過ぎないという警告は、今日の韓国の経済を考える上でも多くの示唆を与えてくれる。